

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	星川 真由美	指導教員 (主査)	山田 孝

論文題目	<b>意味のある生活行為を支援する作業療法士の思考過程</b>
------	---------------------------------

### 本文概要

「目的」 本研究の目的は、MOHO の概念に基づき、MTDLP に求められる真のニーズの把握と作業参加の重要性を検討することにより、意味のある生活行為を支援する OTR の思考の特徴を明らかにすることである。「方法」 アンケート調査にて同意を得た研究協力者の事例を対象に、生活行為向上マネジメント (Management Tool for Daily Life Performance 以下 ; MTDLP) の一連の特徴を検討した。また、OTR が実施したリーズニングの特徴の把握は、人間作業モデル (以下 : MOHO) のリーズニングの概念 (意志, 習慣化, 遂行能力, 環境) に該当するデータを抽出し、真のニーズの把握と作業参加の促しについて検討した。本研究は質的方法論を採用した探索的研究であり、分析には内容分析を用いた。「結果」 MTDLP 事例を検討した結果、真のニーズを把握しても、遂行能力の獲得と環境調整に焦点を当てているという新たな問題が確認された。真のニーズの把握と作業参加の促しは、特に MOHO 理論を学習した者 (本研究のアンケート調査において、卒後教育にて MOHO の研修会に参加し、臨床実践していると回答した者とした) の事例に確認された。卒前・卒後教育の関係性も検討したところ、MOHO 理論の実践者事例は、対象者を身体機能の側面からだけでなく、全体的に捉えるリーズニングを行っており、真のニーズを把握していた。また、対象者の意志に基づいた意味のある作業に従事することを支援していた。「考察」 1. 作業参加に至らなかった事例 : 真のニーズは把握していたが、対象者が自ら意思表示した意味のある作業への作業参加が不十分な事例が、入院群で 2 事例見られた。この作業参加に至らなかった要因は、OTR の記述内容の特徴より、①介入期間による制約、②介助量の軽減に焦点を当てた介入が求められていた。真のニーズに基づくプログラムの立案に至らなかったためと考えた。2. 新たに見つかった課題 : どの事例でも、真のニーズを把握していたが、実際には、対象者を取り巻く環境に求められる能力を獲得することに焦点が当てられており、機能訓練や ADL・IADL 動作能力の獲得のための訓練が中心であった。真のニーズに基づいた介入、作業参加の促しではなかったと考えた。「結論」 対象者にとって意味のある生活行為を支援する OTR の思考過程は、対象者の作業的存在の理解の促しと、機能訓練だけではなく、生活の基本となる ADL・IADL 訓練、そして、意味のある生活行為 (作業) そのものを実践する機会を設けつつ、入院生活 (介入早期) より、意味のある生活行為 (作業) から切り離された生活からの脱却を図っていることが示唆された。「結語」 本研究を通し、真のニーズを反映させたプログラムを実施することで作業参加を促す視点やその人らしさを捉える視点を補う必要性を感じた。作業参加を促した事例とそうでない事例の成果の比較検討を行い、真のニーズを反映させたプログラムの実施の重要性が明らかになるだろう。「謝辞」 本研究の実施にあたり、研究の主旨をご理解いただき、アンケートに答えてくださった作業療法士の皆様をはじめ、ご指導して頂きました目白大学大学院山田孝教授ならびに修了生に心から感謝申し上げます。「文献」 1) 一般社団法人日本作業療法士協会 (2014a) : 作業療法マニュアル 57. 生活行為向上マネジメント. 2) 一般社団法人日本作業療法士協会 (2014b) : 平成 25 年度老人保健健康増進等事業. 医療から介護保険まで一貫した生活行為の自立支援に向けたリハビリテーションの効果と質に関する評価研究事業. 報告書 I ~ III. 3) 大松慶子, 石井良和, 山田孝 (2015) : 意味のある作業とは-1995 年~2010 年における国内事例報告の質的検討-. 日本保健科学学会誌 18 (2), 68-80.